接頭辞「真」の語形成に見る音韻形態

中　野　琴　代*

目　次

1. はじめに
2. 語形成の音韻規則
2-1. 結合の音韻形態
2-1-1. 連濁
2-1-2. 促音または撥音の挿入
2-1-3. 結合の形態素とその意義
2-2. アクセント
3. 結論

1．はじめに

「真っ赤，真っ青，真っ暗，真正直，真っ平，真ん中，真ん丸」等，接頭辞「真(マ)」は後続の名詞，形容詞，形容動詞と結合して一語を形成し，その性質が真実の，純粋で混じりけの無いことを強調する表現である。その「真」と後部要素との結合部分には，多くの場合促音挿入が起こるが，起こらない場合も多く，また音韻環境により促音ではなく撥音の挿入，連濁，さらに母音削除や，他の子音挿入等の条件が加わることもあり，さまざまな結合のあり方を呈している。

このようにさまざまな結合の音韻形態を有することは反面，複雑な問題となり，一般化するほどの他の豊富な語例を持たないこと，また現在用いられている和語の接頭辞の多くは将来の生産性（造語力）があまり無いと見なされることから，個々の語彙の問題として扱われることはあっても，その音韻形態素の住み分けについては曖昧なままである。

しかし明文化された規則が無いという理由だけで語の個別の問題と処理してしまうのは納得がいかない。私たち母語話者はこのような語形成に関わる音韻規則を教科書等で学ばなくても，そこに促音挿入をするべきかどうか（またはどちらでも良いか），また促音以外の撥音，別の子音挿入等，どの音韻形態素を選択するのかを記憶に基づいて判断し，実際に音声に乗せて発話しているのである。つまり，母語話者は音韻環境や他の条件等（それを意識しているかどうかは別にして）により実際にどのような音声を発するべきか，判断，使い分けができるのであり，そこには何らかのルールが働いているはずである。

ここでは接頭辞「真」を持つ語を取り上げ，整理，分析し，語の結合に於いてどのような音韻形態素がどのように機能しているのか，できる限り曖昧性を排し，明確にしたい。また同時に，現代日本語の中で促音の音韻的特徴が意識されているのかどうか，意識されているとすればどのように意識されているのか，その内容についても考えるきっかけとしたい。

2．語形成の音韻規則

語形成の中で結合を示す音韻形態素として最も有力なのは，連濁とアクセントとされる(1)。ここでは最初に接頭辞「真」と後部要素との結合部分の音韻形態について整理・分析を行い，次いでアクセントを検討する。

2-1．結合の音韻形態

接頭辞「真(マ)」を持つ語（後部要素）の多くが和語であり，漢語との組み合わせはごく少数である。接頭辞「真」と後部要素の語とは連用修飾―被修飾の関係をなし，一語を形成している。このような語と語のつながりを音韻的に証明するものとしては連濁が代表的であるが，接頭辞「真」による語形成では，連濁の現象以外に促音や撥音の挿入等，さまざまな形態が見られる。以下，連濁，次いで促音と撥音の挿入について整理し，最後に結合の形態素とその意味特徴について考える。

＊下関市立大学常勤嘱託講師

2-1-1. 連濁

連濁は，結合による語形成（前部要素＋後部要素→一語）の中で後部要素の初頭子音が清音（カサタハ行の無声子音）から濁音（ガザダバ行の有声子音）へと転換する現象を言う。この現象を逆に見れば，後項初頭子音が清濁の対立を有する音以外の環境では連濁は起こらず，また音韻条件に適っていても必ずしも起こるとは限らないが，連濁が生じる場合，それは前部要素と後部要素の結びつきの強い，すなわち熟合度・慣用度の高い一語となることを示している(2)。

接頭辞「真」による連濁として以下のような語例が見られる。

□グループA：真顔(マガオ)，真心(マゴコロ)，真金(マガネ※以下固有名詞)，真鴨(マガモ)，真鯉(マゴイ)，真鯛(マダイ)，真竹(マダケ)，真蛸(マダコ)，真鱈(マダラ）等

「真顔」「真心」の「真」は「嘘偽りの無い，誠実，まじめな」ということを表し，固有名詞の「真金」以下ではそれぞれの種類にあって「別種の要素の混じらない，その種の標準・代表となる物」という意義が付加される。この「他の不純な要素の入らない，真実の，本物であるもの」という意味で両者は共通している。また連濁は起こしていなくても意味的に同じ，言い換えれば，連濁の規制（ライマンの法則や後部初頭子音にかかる規制）が原因で連濁はしないが，内容として同類と考えられる語を含めれば，その数は更に増える。

□グループA'：真受け(マウケ「真に受ける」の意)，真葛(マクズ)，真砂(マサゴ)，真河豚(マフグ)，真水(マミズ)，真人間(マニンゲン）等

グループA（連濁が発生している）とA'（連濁はしないが，同類と見なされる語群）は，意味だけでなく，その全てが名詞という品詞性でも共通している。

後述するように，和語の場合，促音は濁音の前に立たないという性質があり，語の結合部分において促音と連濁とは共存しない。グループA及びA'の語群も促音挿入例は無く，音韻的特徴は連濁のみである。

2-2-2. 促音または撥音の挿入

最初に語例をあげる。促音挿入型のグループである。※付加の語は促音（撥音）挿入形と非挿入形の両方が辞書に記載されている，いわば「ゆれ」ている語とされるが，現在はそのほとんどが促音挿入形優勢である。

□グループB：真っ赤(マッカ※)，真っ青(マッサオ※)，真っ暗(マックラ※)，真っ黒(マックロ※)，真っ向(マッコウ)，真っ最中(マッサイチュウ)，真っ逆様(マッサカサマ※)，真っ盛り(マッサカリ)，真っ先(マッサキ)，まっさら(マッサラ)，真っ四角(マッシカク※)，真っ正直(マッショウジキ※)，真正面(マッショウメン※)，真っ白(マッシロ※)，真っ芯（マッシン※)，真っ直ぐ(マッスグ※)，真っ平ら(マッタイラ)，真っ只中(マッタダナカ)，真っ裸（マッパダカ※)，真っ平(マッピラ※)，真昼間(マッピルマ※)，真っ二つ(マップタツ※)

以上の語例は名詞であるが，その多くは形容動詞(形容詞と形容動詞の両方を持つ語も）または副詞としての品詞も持つ。

意味としては，元の語が表す特定の性質または状態の概念を，接頭辞「真」をつけることにより強調する，主観性の強い表現であること，もっぱら話し言葉で用いられる口頭語形という特徴がある。

次に音韻形態を見る。上述の語例の内，「真っ赤」「真っ青」「まっさら」「真っ向」の4語は，元の語本来の音構造からは促音挿入のルールに違反するものである。本来，促音は常に語中に位置し，語頭，語尾には立ち得ない音素であり，その音韻環境は，和語では前部要素末尾の母音（(C) V）と後部要素初頭子音の清音（清濁の対立を持つ無声子音カサタハ行）の間である。音声的には逆行同化，つまりカサタハ(パ)行の破裂音，破擦音，または摩擦音のいずれかという形で実現する。つまり促音は和語においては有声音（濁音はもちろん，母音，半母音，ナ行・マ行の鼻音，ラ行音）の前に立つことは無いのであり，前述の4語例はその条件に適っていないのである(3)。4語の音韻構造について模式化すると，以下のようになる。

・真っ赤(マッカ) /makka/≠マアカ
　/maaka/＜真(マ)＋赤(アカ)
・真っ青(マッサオ) /massao/≠マアオ

/maao/＜真(マ)＋青(アオ)

・まっさら(マッサラ) /massara/＜マサラ /masara/≠マアラタ/maarata/＜真(マ)＋新た(アラタ)

・真っ向(マッコウ) /makko:/≠マムコウ /mamuko:/＜真(マ)＋向こう(ムコウ)

「真赤」では,「真(マ)」の後に元の語の初頭母音「ア」が続くことになり，そのままでは促音挿入は起こらないはずであるが,「ア」[-a-]をスキップ（母音削除）し，同時に「マ」と「カ」の間で子音重複現象（促音挿入）を起こしている例である。また元「アカイ」(形容詞）は音形が「マアカイ＞マッカナ」に変わり，品詞が形容動詞へと変わっている。

「マッサオ」「マッサラ」も，本来「真(マ)」に続く第二・第三音節が「アオ」「アラ」と有声音の連続であって促音挿入の条件に適っていない。この2語は語中に無声子音の音素を持たないため，第二音節の母音に[-s-]という子音を付加することにより促音挿入を実現させている(4)。また「マッカナ」同様,「マッサオ」(名詞）では，形容詞形「アオイ」から「マッサオナ」の形容動詞へと品詞が変化する。

「マッコウ」は語源として一説に「マムコウ＜真＋向こう」とされるが，それに従えば「真(マ)」に鼻音が続く音声環境からは，本来は撥音挿入（後述）は起こっても促音挿入は起こり得ないはずのところである。が，実際には「ム」が脱落，促音挿入形を実現させている。

次に撥音挿入型の語群を見る。

□グループC：真ん中(マンナカ※)，真ん真ん中(マンマンナカ)，真ん前(マンマエ)，真ん丸(マンマル)

接頭辞「真（マン)」の意義上の役割は促音挿入の場合と同様それぞれ「中心，前，丸(い)」という性質・状態を強調することである。

音声的に撥音の置かれる音韻環境は語中または語尾で，和語の場合，語中では濁音（ガザダバ行）及び鼻音（ナ，マ行）の前に起こり，促音のように連濁と絶対的に共存しないわけではない。しかし接頭辞「真(マ)」の結合では連濁と併存しているケースは無い。音声的には語中では逆行同化によって実現し，語末では一般的に口蓋垂鼻音として発音される(5)。

濱田（1949）は，促音と撥音の相関関係について以下のように解説している。

上代から中世にかけ「促音と撥音との表記法は相互に共通せるもの多く，（中略）到底現代に於けるが如き区別意識を当時の人々が此の両音に持っていたとは考えがたい」と，謂わば「未分化の状態」にあったとし，元々この両音素に意義上の違いがあったのかどうか，疑問を呈している。しかし現在使用されている用例の中では「音があたえる感情価値の相違」として「例えば促音は物事の急速に行われる様な，（中略）撥音はなだらかな感じをあたえるといった風」と促音と撥音のイメージを表現し，現代日本語の中での両音の差異を論じている。

接頭辞「真」と後部要素結合に挿入される促音と撥音は，どちらも実際に発音される音声としては語の後部要素初頭子音と同じ調音，つまり逆行同化による相補分布をなしており，意味的対立へとつながる要素は見られない。つまり接頭辞「真」と後部要素との間に挿入されるのが促音か撥音かによって，濱田（1949）の言うように音のイメージは多少違っても，表す意味としては，（促音，撥音挿入の）どちらも元の語の表す性質・状態概念の強調であり，促音か撥音かでの違いは特定できない。

2-2-3. 結合の形態素とその意義

以上，接頭辞「真」を持つ語群から，連濁を起こしているグループ，促音または撥音挿入のグループと音韻形態別に見てきた。連濁グループと促音（撥音）挿入グループとでは，接頭辞「真」によって付加される意味特徴の違いが見られる。

(1)連濁を起こしているグループ：嘘偽りの無い，まじめな，真実であるもの，本物固有名詞ではその種の代表的，標準となるもの

(2)促音または撥音挿入グループ：ある状態・性質について，それが完全，本格的，混じりけのない，純粋であるという強調

(1), (2) グループとも「不純な要素の入らない」という意味を持つことでは共通している。が，(1)グループがその意義そのものを表す抽象名詞，及び固有名詞と名詞のみに限られるのに対して，(2)グループでは性質・状態の概念の強調，強勢ということが意義の中心であり，元の語からさらに発展した意味特徴を持つものも多い。また品詞としても名詞以外に，形容（動）詞，副詞の用法を持つ。

次に，(2)グループの語が元の語と実際にどのよう

に意味が変わるか，比較・対照を行う。

- 例①：車に正面から/真正面から衝突する。
- 例②：彼はとても正直な/真っ正直な人だ。
- 例③：熱が出て，とても赤い/真っ赤な顔をしている。
- 例④：非常に赤い太陽（＊）/真っ赤な太陽
- 例⑤：ショックで顔色がとても青い/顔が真っ青だ
- 例⑥：部屋の中は完全に暗い（＊）/非常に暗い/真っ暗だ
  部屋の中は少し暗い/少し真っ暗だ（＊）

例①②③は，接頭辞「真」を付加することによってそれぞれ「正面から」「正直な」「赤い」という性質・状態が強調されたもので，元の語と大きな意味の違いは無い。しかし例④では，「赤」という色の程度が強調される「非常に赤い」と，純粋で絶対的な赤，時に熱量感，躍動感を与える「真っ赤」とでは意味が，ひいては用例の正誤にまでかかわる。また例⑤では顔色が「とても青い」と単なる「青」色の強調表現と，「真っ青→血の気が無い」とでは，やはり後者のほうが聞き手の感覚により強く訴えるのではないだろうか。例⑥になると違いはよりはっきりする。「非常に暗い→完全な暗闇とは言えない」と「真っ暗だ→光源は全く無い」とでは意味が変わり，また「暗い」（「明るい」も）が段階・程度概念と関係する形容詞であるのに対して，「真っ暗」は「暗い」から派生した語であっても段階・程度の表現を受け付けない，語自体が「純粋な闇」を表す形容動詞となり，語としての違いは明確である。

このような意味特徴の違いは，促音挿入形と非挿入形の対照例でも観察される。

先に，語例として非連濁・促音（撥音）非挿入型の語例を以下にまとめて示す。上述のグループA（連濁発生型），B（促音挿入型），C（撥音挿入型）と対照するためである。

□反グループA・B：真北（マキタ），真下（マシタ），真東（マヒガシ），真冬（マフユ）
真昼（マヒル）（後部要素初頭子音に無声子音（カサタハ行）を持つにもかかわらず，一般的に連濁も促音挿入も起こらない語群）

□反グループC：真夏（マナツ），真西（マニシ），真向かい（マムカイ※「真向かい」「真向き」も），真南（マミナミ）（後部要素頭子音がナ・マ行であるにもかかわらず撥音挿入をしない語群）

□グループD：真新しい（マアタラシイ），真一文字（マイチモンジ），真上（マウエ），真後ろ（マウシロ），真裏（マウラ），真表（マオモテ），真夜中（マヨナカ），真横（マヨコ）（後部要素初頭子音が母音，半母音で始まる語群）

これら反グループA・B，反グループC，及びグループDとも，方向・方角・位置（上下，前後，表裏，横，向かい(向き)，東西南北），季節（夏冬），時刻（昼，夜中）等を表す，客観性の強い内容の語が多い。これらの語例の大半は接頭辞「真」を加えることにより，その方向，時などに「正確に，ちょうど」という意味が付加される。

では促音（または撥音）の有無により実際にどのような違いがあるのだろうか？ 促音の有無によるペアを以下に比較する。

- 例⑦：a．真昼間（マッピルマ）のような明るさ（＊）
  b．真昼（マヒル）/昼間（ヒルマ）のような明るさ
- 例⑧：a．真っ向（マッコウ）から対立する
  b．真向こう（マムコウ）・真向かい（マムカイ）から対立する（＊）
- 例⑨：a．真っ向（マッコウ）に建つビル（＊）
  b．真向こう（マムコウ）/真向かい（マムカイ）に建つビル
- 例⑩：a．まっさら（マッサラ）の気持ちで取り組む
  b．真新しい（マアタラシイ）気持ちで取り組む（？）

例⑦～⑩では，a（促音挿入）型とb（非挿入）型とで意味の差異が感じられる。

例⑦b．「真昼／昼間の明るさ」は正午の太陽が最も高い時刻（正確に12時）を指す自然な表現となるが，「真昼間（マッピルマ）」は漠然と昼時ではあるが，「朝でも夜でもない昼の真っ最中」というイメージが強く，必ずしも「日の光が最も強く感じられる」わけではない。

例⑧⑨について，「真っ向」は反対・対立・否定の表現の中で「正反対の立場」からという内容を表し，「真向こう/真向かい」は「物理的向き（位置）が自分と相手側とで全く逆」という意味であり，両者間には抽象的立場と物理的存在感との違いが有

る。

例⑩a.「まっさらの気持ち」というと，「まだ誰も手をつけていない，純粋で白紙の状態」という印象が強く，「真新しい」で表現される「全く新しい」状態にさらに「精神的に汚れていない」というイメージがプラスされていると感じられる。

促音（撥音）の挿入は連濁現象同様，全ての語で起こるわけではない。少数ではあるが，「真新しい，真一文字」のように性質・状態概念を強調する表現でありながら促音挿入とならなかった語例もあり（これらは後部要素が有声音で始まるという音声環境が原因であろう），促音（撥音）非挿入型の語では強調の程度が低いということにはならない。また促音（撥音）挿入を持つ語が全て特殊な語義を有することにはならない。が，促音の，発音の急な停止という調音や，促音「ッ」を挟んだ結果，その前後の音が明瞭に発音されること，また聞き手からは音を区切っていくように聞こえる促音の発音イメージは，強調，強勢（ストレス）の感覚に打ってつけであり，その個性が，聞き手に対して，元の語では表現できない，他と比較できないほどの感覚を伝えたいという話者の表現意図とも一致するのではないだろうか。そしてそれが元の語義からさらに発展した意味特徴を持つことへとつながっていったのではないかと考えられるのである。

2-2. アクセント

接辞と語の結合によって形成された語では，アクセントは複合語同様の単一のアクセント句，すなわち一語としてのまとまった単位を為す。以下に，接頭辞「真」を持つ語群を促音（撥音）挿入型と非挿入型に分け，それらをさらにアクセント型別に分類する。日本語標準語のアクセントはピッチ（高低）アクセントである。

文中，記号○は低い音のモーラ（拍）を，●は高い音のモーラを，「’」はアクセント核（音の下がり目）をそれぞれ表す。何も記号の付いていない語は平板式平板型アクセントの，アクセント核を持たない語である。また※印は二つのアクセント型を持つ語である。

□促音（撥音）挿入型

・平板式平板型：マンナカ（真ん中），マンマル（真ん丸※），マンマルイ（真ん丸い※）

・起伏式頭高型：無し

・起伏式中高型：マック’ラ（真っ暗），マック’ロ（真っ黒），マッコ’ー（真っ向），マッサ’イチュー（真っ最中），マッサ’オ（真っ青），マッサ’カサマ（真っ逆様），マッサ’カリ（真っ盛り），マッサ’キ（真っ先※），マッシ’カク，マッシカ’ク（真っ四角），マッショ’ウジキ（真っ正直），マッショ’ウメン，マッショーメ’ン（真正面），マッシ’ロ（真っ白），マッシロ’イ（真っ白い），マッシ’ン（真っ芯），マッス’グ（真っ直ぐ），マッタ’ダナカ・マッタダ’ナカ（真っ只中），マッパ’ダカ（真っ裸），マッピ’ラ（真っ平），マッピ’ルマ（真っ昼間），マップ’タツ・マップタ’ツ（真っ二つ）マンマ’エ（真ん前），マンマ’ル（真ん丸※），マンマル’イ（真ん丸い※），マンマ’ンナカ（真ん真ん中）

・起伏式尾高型：マッカ’（真っ赤），マッサキ’（真っ先※）

促音（撥音）挿入型の語例の大半は起伏式中高型アクセントである。その他は平板型，尾高型が少数，頭高型は皆無である。

接頭辞「真」の付かない元の語と比較すると，「クロ（黒），シロ（白），アオ（青）」等の頭高型アクセント，また形容詞「クロイ（黒い），シロイ（白い），アオイ（青い）」等の第二モーラにアクセント核を持つ中高型の語では，接頭辞の付いた「真（マッ）～」の語のアクセントの核の位置（「マッ」の直後のモーラに）と一致し，一見，元の語のアクセント型が活かされているように見える語もある。しかしほとんどの語では元の語と「真～」の語とでアクセント型が異なり，全体的には元の語アクセントの影響は無いと考えられる。

□促音非挿入型

・平板式平板型：マアジ（真鯵），マウラ（真裏），マガオ（真顔※），マガネ（真金※），マガモ（真鴨），マコモ（真菰），マナツ（真夏），マニシ（真西），マヒル（真昼），マフユ（真冬），マミズ（真水），マヨコ（真横※）

・起伏式頭高型：マ’ガオ(真顔※)，マ’ガネ(真金※)
・起伏式中高型：マアタラシ’イ(真新しい)，マイチモ’ンジ(真一文字)，マイ’ワシ(真鰯)，マゴ’コロ(真心)，マシ’カク・マシカ’ク(真四角)，マショ’ーメン・マショーメ’ン(真正面)，マニ’ンゲン(真人間)，マム’カイ(真向かい)，マム’コウ(真向こう)，マヨ’ナカ(真夜中)，
・起伏式尾高型：マウエ’(真上)，マシタ’(真下)，マヨコ’(真横※)，

促音（撥音）非挿入型を見る。挿入型と同じく起伏式中高型が最も多く，次いで平板型，尾高型と続き，頭高型も平板型との重複ではあるが，2例ある。元の語アクセントとの比較では，やはり挿入型同様，一貫しての一致は見られない。

このように促音（撥音）挿入型，非挿入型とも元の語アクセントとの一致や影響はあまり感じられないが，実はこの両方の型に共通する大きな特徴が存在する。前述のように日本語標準語では，一つの語の第一モーラと第二モーラとで必ず音の高低が変わるというアクセント原則があるが，「真(マ(ッ)) ～」の語形成もその原則に忠実であり，一つの語としてのまとまりを見せている。

・アクセント例①(平板型)：マウラ(○●●)，マンナカ(○●●●) 等
・アクセント例②(中高型)：マゴコロ(○●○○)，マニンゲン(○●○○○)，マックロ(○●●○)，マッサカリ(○●●○○)，マッスグ(○●●○)，マップタツ(○●●○○)，マンマル(○●●○) 等
・アクセント例③(尾高型)：マウエ(○●●)，マッカ(○●●) 等

※頭高型は他のアクセント型と重複例のみであるため省略

この第一モーラと第二モーラの高低差と関連して，中高型および尾高型アクセントの語では「真っ暗，真っ向，真っ最中，真っ白，真っ只中，真ん前」等等，「真（マ(ッ)）」の直後のモーラにアクセント核が置かれ，その場合「マ」の直後のモーラから高くなり，そのまますぐに音調が降下することになり，「マ(ッ)」の直後のモーラがより際立つという効果が発生する。言い換えれば，この第一・第二モーラ「真(マッ)」とそれ以下のモーラとで音の高低の差をつけるということは，先に述べた一語としてのまとまりを見せるということ以外に，第一・第二モーラ「真(マッ)」とそれ以下のモーラとの差を際だたせ，その結果，接頭辞「真」による強調の役割をより効率的に表現していると考えられるのである。

3．結論

以上論じてきた内容を箇条書きにまとめる。

(1)接頭辞「真」による語形成の結合部は音韻形態別に分類でき，それぞれの音韻形態素はそれぞれの意味特徴を有する。
(2)結合部の音韻形態別に接頭辞「真」は以下のような意義を加える。
・連濁を起こす語：嘘偽りの無い，まじめ，誠実，真実であるもの。固有名詞ではその種の代表，標準となるもの
・促音(撥音)挿入の語：ある状態・性質について，それが完全，本格的，混じりけの無い，純粋であることを強調する

また音声環境等の原因で連濁，または促音（撥音）挿入を起こさない語も語義によりどちらかに分類することができる。

(3)接頭辞「真」の有無，また促音（撥音）挿入の有無により話者の主観的強調がより鮮明に表現される。また語によっては語義が元の語の強調からさらに特殊化することがある。
(4)接頭辞「真」を持つ語は，元の語とは別の一語，すなわち一つのアクセント句としてのまとまりを持つ。
(5)第一モーラの接頭辞「真（マ)」と第二モーラとで音の高低差が存在し，そのことが強調，強勢を際立たせる役割を担う。

このような和語の，結合部の促音（撥音）挿入の例としては，他に「小っ恥ずかしい（コッパズカシイ)」「生粋(キッスイ)」「生っちょろい(ナマッチョロイ)，生っ白い（ナマッチロイ)」「素っ飛ばす(スットバス)，素っ飛ぶ(スットブ)，素っとぼける(スットボケル)，素っ頓狂(スットンキョー)，素っ破抜く(スッパヌク)，素っぴん(スッピン)」等，また複合語では「打ちっ放し(ウチッパナシ)，打ん殴る(ブンナグル)，打ん投げる(ブンナゲル)」等があ

る。その数は多いとは言えないが，その促音(撥音)挿入の役割は，「真」同様，接頭辞「小(コ)」「生(キ)，生(ナマ)」「素(ス)」，語「打(ウツ，ブツ)」等が後部要素の語と結合する際，それぞれの意味に強調を加えることである。

翻って現代の若者語の中では「超(チョー)，激(ゲキ)」等の強調の接辞と同様の役割をする「めちゃ，めっちゃ」「むちゃ，むっちゃ」(どちらも副詞として)があり，「めっちゃくやしい」「むっちゃ腹立つ」等と使われる。また単独の語であるが，第一モーラと第二モーラの間に促音を挿入することでよりその意味を強調する語は数多い。「アッタラシー(新しい)，ウッソー(嘘)，デッケー(でかい)，ゴッツイ(ごつい)，ヒッデー(ひどい)，ヤッベー(やばい)」等，やはり性質・状態概念を表すものであり，形容詞が多い。いずれも口頭語のくだけた，ぞんざいな表現である。

---

(1) 窪薗(1995)では，日本語と英語を対照し，日本語について複合語規則として以下のように言う。

a．形態特徴：前部要素が名詞化する。

b．音韻特徴：(i)後部要素の初頭子音が有声化する(＝連濁)

(ii)アクセント句が一つにまとまる

c．意味特徴：意味が特殊化する

d．統語特徴：他要素による部分修飾を許さない

以上は自立性のある二つの語の複合についてであるが，ここで取り上げる接頭辞「真」による語形成(付属語＋自立語)でもaを除いて当てはまる内容であり，これらの特徴は考察の中でも随時，取り上げていく。

(2)連濁は語種の中では，和語に最も多く，漢語，外来語では非常に少ない。本来，和語の音節構造は，語頭に濁音を持たず，従って和語の中の濁音は常に語中に有り，その音節は複合語の語と語の接続部分(後部の頭子音)であることを表す。複合語(前項＋後項)の後部頭子音が清音(カサタハ行－清濁の対立を持つ無声子音)から濁音(ガザダバ行の有声子音)に変わる現象。連濁の起こる他の条件は以下の通り。

①熟合度・慣用度の高いものに起こる。

②統語構造では並列構造で起こりにくく，連用修飾-被修飾構造で起こりやすい。

格関係では目的格－動詞，主格－動詞の関係では起こりにくい。

③前項の末尾が撥音，次いで長音の後の場合，発生しやすい。

④次の条件では連濁は生じない。

：促音の直後，畳語型の擬声語・擬態語，後項の第二(第三)音節が濁音の語である場合(ライマンの法則)

⑤品詞では，複合動詞(動詞＋動詞)では比較的発生しにくく，動詞と形容詞の組み合わせでは起こりやすいとされる

(3)外来語では促音について別のルールが働くため，「ベッド，バッグ，グッドバイ」等の語例があるが，それらも日本語に導入されて時間が経つと「ベット，バック，グットバイ」と無声化して発音されることが多い。

(4)かつて上代日本語には母音は語頭に立つが，語中ではその重複を忌避するというルールがあり，そのため複合による語形成で母音が重複する場合，母音削除，母音融合，子音挿入等が行われたとされる。現存する古語の中にも後項初頭子音が広母音[a]に限り，「春雨(ハルサメ※ハルアメ)」，「氷雨(ヒサメ※ヒアメ)」等の[-s-]子音挿入の例がある。「まっさら」は「真」と「新た」の結合とされるが，「サラ(更)」からの連想にもよっていたであろうとされる(濱田(1949))。しかしながら「真新しい(マアタラシイ)」は既に形容詞「アタラシイ」が誕生した後の語形成と思われ，「新しい」の語音入力と出力一致の原理に忠実にという理由からであろう，「マッアタラシイ」または「マッサラシイ」とは成らない。

(5)撥音は，促音とは対照的に，濁音との相性が良いとされる。上代日本語では清音と濁音の対立は意識されていなかったが，語中での鼻濁音が発展して現在の濁音(連濁も)へと変化したとされ，撥音と濁音とはつながりが深い。

参考文献

・濱田敦(1949)「促音と撥音　上・下」『人文研究』1－1，1－2(『国語史の諸問題』和泉書院(1985)所収)

・濱田敦(1962)「ゆれ」『国語国文』31-6(『日本語の史的研究』臨川書店(1984)所収)

・小野浩司(1991)「外来語としての英語の促音化について」『言語研究』100

・國金海二・木村秀次(1994)『研究資料漢文学10　語句・語法　漢字・漢語』明治書院

・窪薗晴夫(1995)『日英語対照研究シリーズ　語形成と音韻構造』くろしお出版

・高山知明(1995)「促音による複合と卓立」『国語学』182

・那須昭夫(1996)「二字漢語における促音化現象――最適性理論による分析」『音声学会会報』213

＜資料―語用例収集＞

・『日本国語大辞典』(小学館　1981)

・『日本語大辞典』(講談社　1989)

・『漢字引き・逆引き　大辞林』（三省堂　1997）
・『NHK 日本語発音アクセント辞典』（日本放送出版協会　1998）
・『逆引き広辞苑』（岩波書店　1999）
・『辞典＜新しい日本語＞』（井上史雄・鑪水兼貴編著　東洋書林　2002）